

重複障害のある子どもの初期的な視機能や萌芽的なコミュニケーションを評価し実践につなげるためのアセスメントはどのようなものですか？

【研究を行った背景】

特別支援学校には、多様かつ重度の重複障害のある児童生徒が在籍するようになってきました。コミュニケーションが困難な場合、従来のアセスメントツールでは「測定不能」となる場合が多々あり、実態把握が十分にできないまま、教育が開始される場合が少なくありません。また、学校現場では教員が「このやり方でよいのか」ととまどいながら指導を行っているという実態があります。特に、重度・重複障害の児童生徒の「視覚を通じた環境の把握」と「コミュニケーション」について、見落としがちな初期的な力やそのゆっくりとした変化に対する教員や保護者の気づきを促すアセスメントが望まれていました。本研究では、教員が実施しやすく、実態把握が具体的な教育的支援につながるアセスメントを提案することを目的としています。

【研究結果】

重複障害のある子どもの「視覚を通じた環境の把握」と「コミュニケーション」の初期的な力を評価するツールとして以下のアセスメントを提案し、研究協力機関で試行しました。

●視覚を通じた環境の把握に関するアセスメント●

○「実践に生かす見え方アセスメント」

重度の重複障害のある子どもの多くは、視覚障害を併せ有しています。「見えているかどうかわからない」という状態の子どもを対象として「実践に生かす見え方アセスメント」を提案しました。このアセスメントには次の特徴があります。

- ①最初期の視機能（光覚と色覚）についてのどの教員もアセスメントできるよう工夫したこと
- ②現場で調達できる資材を用いること
- ③評価が実践につながる方法を提案すること

また、重複障害のある子どもの多くが有する中枢性視覚障害の情報についても、国内外の知見を集め、現場の教員にわかりやすく整理して提示しました。

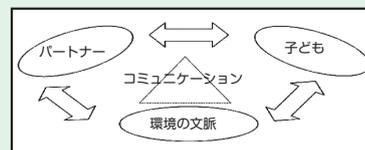


<開発した色のアセスメント視標、及びTACによる評価結果を実践につなぐための疑似体験調整ゴーグル>

●コミュニケーションに関するアセスメント●

重複障害のある子どもとの初期的なコミュニケーションを支えるモデルを示し、支援の基本となるコミュニケーションのパートナーが満たすべき3つの条件を整理しました。

- ①子どもを知ること
- ②パートナーの役割を広げること
- ③環境の文脈を整理すること



この視点に基づき子どものコミュニケーションの初期的な力への気づきを促す2つのアセスメントを提案しました。

- 「受信方法と発信方法の発達的变化と整理」
コミュニケーション方法の発達的な変化について、最初期から高度な記号操作までを体系的に反映できるツール
- 「やりとりの芽生えと展開」
発達の最初期のやりとりのコミュニケーション行動が細かく反映できるツール

【アセスメントの試行とその成果】

研究協力校および事例提供校において、これらのアセスメントを教員と共に実施し、その結果を教育的支援につなげる研修を行いました。また、独創的な教育実践を展開した教員から情報収集を行いました。主な事例を以下に挙げます。

- 1) アセスメントの結果、蛍光色が見えることがわかり、視覚を最優先に楽しむ美術の授業を展開していた事例
- 2) 芽生えてきた視覚的探索活動を支援するよう関わりの方針を変えたことで、ものを見る力、環境を把握する力、やりとりの力が育っていった事例
- 3) 受信方法・発信方法を工夫し「絵日記」を活用した聴覚障害のある児童の事例
- 4) 受信方法・発信方法を工夫し「音の日記」を活用した視覚障害のある生徒の事例
- 5) TAC等の研修を受けて教員が疑似体験を行い、環境面への配慮に結びつけた事例
- 6) アセスメントから得られた子どもの見えの情報を、わかりやすい環境づくりや見えやすい教材、教員の関わりの配慮へと結びつけた事例
- 7) ケース研究会を継続することで、子どもの支援に関する様々な情報を教員が共有していった事例

【本研究成果の活用】

(1) 各学校における試用とアセスメント結果の教育実践への活用、及びフィードバック

研究に協力していただける特別支援学校（肢体不自由）や教員を増やして、アセスメントの試用を重ねます。そのフィードバックに基づいて、より現場の教員が使いやすく、子どものニーズを反映しやすいものに改善します。

(2) 教育委員会や本研究所における研修による普及

教育委員会が主催する研修会や本研究所で実施している特別支援教育専門研修において、本アセスメント研究の内容を紹介し、より多くの学校で活用していただけるよう普及活動を行います。

【研究成果報告書】

研究成果報告書の目次は、以下のとおりです。

はじめに

研究の概要

第1章 重複障害児のアセスメント研究の背景

第1節 重複障害児のアセスメントに関するニーズ

- 1 特別支援教育における重複障害教育の課題と実態把握に関するニーズ
- 2 特別支援学校（肢体不自由）における児童生徒の実態把握の状況と課題

第2節 本研究で目指すアセスメントの方向性

- 1 視覚を通じた環境の把握に関するアセスメントの方向性
- 2 コミュニケーションに関するアセスメントの方向性

第2章 視覚を通じた環境の把握とコミュニケーションに関するアセスメントの提案

第1節 重複障害児の視覚を通じた環境の把握に関するアセスメント

- 1 重複障害児にみられる視機能の特性と教育的ニーズ
- 2 特別支援学校（肢体不自由）における児童生徒の実態把握の状況と課題

第2節 重複障害児のコミュニケーションに関するアセスメント

- 1 コミュニケーションの方法に関するアセスメントの提案
- 2 やりとりの芽生えと展開についてのアセスメントの提案

第3章 アセスメントの試用とアセスメント結果の教育活動への活用

<報告1> 聴覚中心の関わりから、見える色の活用と「眩しさ」への配慮を行った事例

<報告2> アセスメントの結果蛍光色が見えることがわかり、視覚を使って楽しむ美術の授業を展開していった事例

<報告3> 芽生えてきた視覚的探索行動を支援するよう関わりの方針を変えたことで、ものを視る力、環境を把握する力、やりとりの力が育っていった事例

<報告4> 受信方法と発信方法を工夫し、絵日記を活用した聴覚障害のある児童の事例

<報告5> ケース研修会を継続することで、子どもの支援に関する情報を教員が共有していった事例

<報告6> アセスメントによって子どものやりとりの力の芽生えを確認したことで、保護者が自信を持って子どもとのコミュニケーション関係を築いていった事例

<報告7> 「見え方アセスメント」の実施の流れと評価結果を活かした実践およびコミュニケーションを深める「音の日記」の活用についての事例

<報告8> TAC等の結果を受けて教員が疑似体験を行い、環境面への配慮に結びつけた事例

<報告9> 「先生、うちの子見えてると思いますか？」教員が得た見えの情報を、わかりやすい環境、見えやすい教材、教員の関わりへの配慮へと有機的に結びつけた実践を行い、アセスメントによって確認を行った事例

研究の成果と今後の課題

資料：ゴードン N ダットン「視覚系についてのより詳細な情報」

【関連情報】

○視覚を通じた環境の把握に関するアセスメントに関連した文献

Dutton, G.(2003). A more detailed look at the visual system. In M. Buultjens & H. McLean (Eds.), Cerebral palsy and visual impairment (CPVI) in children: experience of collaborative practice in Scotland. Scottish Sensory Centre, Edinburgh.

Roman-Lantzy, C.(2007).Cortical visual impairment? An approach to assessment and intervention.AFB Press, New York.

○コミュニケーションのアセスメントに関連した文献
中澤恵江（2001）盲ろう児のコミュニケーション方法—分類と体系化の試み—. 国立特殊教育総合研究所紀要, 28, 43-55.

Stillman, R., & Battle, C.(1985).Callier-Azusa Scale(H). Program in communication disorders. University of Texas at Dallas. Callier Center for communication disorders.

本リーフレットは、研究所で行った次の研究を基に作成しています。

【研究課題名（研究期間）】

課題別研究「重複障害児のアセスメント研究—自立活動のコミュニケーションと環境の把握に焦点をあてて—」（平成18年度～平成19年度）

【研究組織】

研究代表者：齊藤由美子

研究分担者：中澤恵江 大崎博史 後上鐵夫